焦土と化した田老鉱山

猛火のツメ跡

どっと"炎の津波" 一瞬に四百戸をのむ

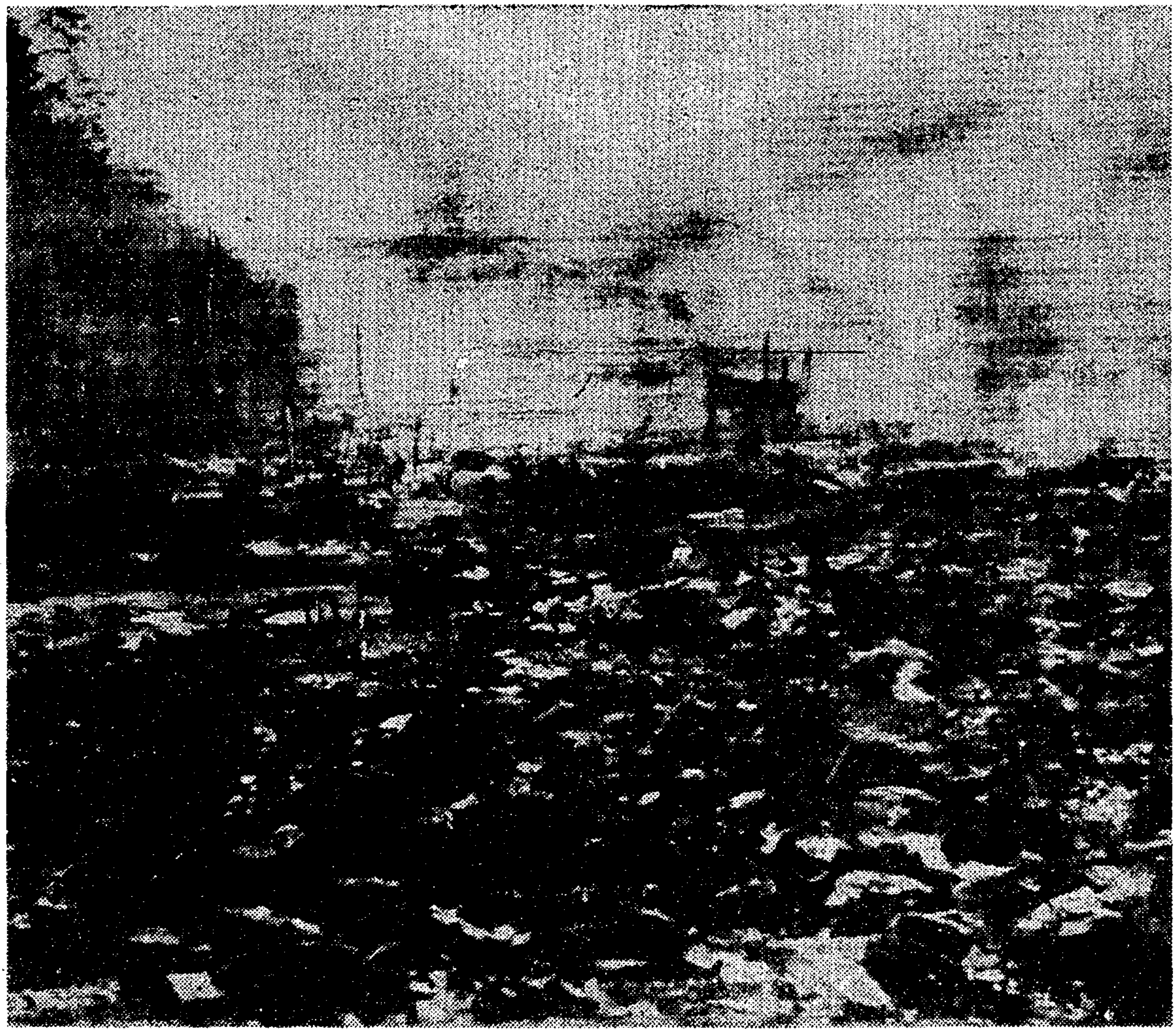
【田老町にて西川、照井、根橋特派員発】したたるような緑の山が瞬間に炎の山と変わった。そんなことがあるかと思われるような出来事である。下閉伊郡田老町鋤之沢のラサ工業田老鉱業所は炎の波に囲まれて全滅し、二千百人の鉱員と家族が焼け出され、働き場所と住宅を一瞬に奪われてしまった。

"火の輪"をくぐって

○…現地のもようを伝えようと写真電送機を積んだジープは二十九日午後十時半盛岡を出発、宮古にはいったのは三十日午前二時半、同市花輪の背後の山は真っ赤に燃えていた。宮古警察署では「いま燃え出したのは別口ですよ」と語っていた。停電で真っ暗な宮古市内を突っ走り、進路を田老町へと北にとる。宮古市崎山あたりから山のあちこちが燃えている。道路ばたまで火がのび山火事特有のむせかえるような煙で、全焼した崎山地区の女遊戸部落は残火の海のよう。土台石だけが燃えずに残っている。田老鉱山から宮古までの索道のヤグラにも火がついてサーカスの火の輪くぐりの要領で全速力で危険な火の門を通り抜けること三度だった。

緑の山もひとなめ

○…田老町も停電、北東の山に燃える火がはえて沈みかけている十五夜の大きな月が赤みがかってみえた。鉱業所近くになると谷間からめらめらと火が燃えのぼって道路をなめている。まるで地獄絵図のよう。鉱業所に着くと周囲の山は赤黒い地はだをあらわし、焼け残った木がぶすぶすくすぶっている。地上の建物はなにもない。一面焼け野原の廃墟。警備員が四、五人ぼつんとたっていた。「みんな焼けてしまった。だれもいませんよ」と教えてくれた。



写真は㊤全焼した田老鉱山の焼け跡㊦田老町公民館に避難した被災者

病院、学校も焼失

○…長内川の橋が焼け落ちて車では進めない。歩いて川を渡った。鉱山の心臓部といわれるたて坑のヤグラをはじめ、選鉱場、変電所、本館事務所、病院、学校、所長宅から鉱夫の社宅まで大小四百余あった建物が完全に一つも残っていない。破れ水道で顔を洗っていた警備員が「あの山のかげにどうしたわけか一戸建の住宅が一むねだけ残りました」と語った。

二十九日午後三時半ごろ「八石が山火事で民家に燃え移る危険がある」との知らせがはいりました。同四時ごろ西の裏山から火が見えたら、たちまち四方の山に広がりました。二〇㍍の突風に火は荒れ狂い手がつけられなくなり、一時は百五十人の消防団員も全く火に囲まれて危険になりました。高台のグラウンドに登ったり、長内川にはいったりして九死に一生を得たとのことでした。

ひっそりと"死の町"

○…廃墟の田老鉱業所にも朝がきた。田老町公民館の避難所で一夜をあかした三浦採鉱課長が山に登ってきた。含銅硫化鉱と硫鉱を日産六〇〇〇㌧出していた機能はストップしたが、被害は地上だけで坑内に影響はなかった。

被災者、公民館で一夜送る

田老鉱業所の従業員と家族二千百人は田老町公民館で一夜をあかした。避難の途中に落石などでふたりほど軽い負傷をした。三十日朝は風も落ちつき晴天で、ほとんど着のみ着のままで避難した人たちは明るい顔で点呼に出たり朝食のパンの配給を受けたりしていた。

すぐ復旧にかかる

田老鉱業所小野所長の話　会社の損害は十億円ぐらいになるだろう。従業員の整理など合わせて十三億円ぐらいになるが、さっそく復旧に取りかかる。閉山なんてとんでもない。昨夜はみんなほとんど寝ていないので三、四時間休ませ昼ごろから全員山に登り作業を開始する。

田老で緊急町議会

田老町は三十日午前十時から緊急町議会を開き、田老鉱業所火災対策を協議した。盛岡に出張中の久保町長はハイヤーで帰町、三十日夜明けを待って現場を視察したが「大変なことです。さっそく町議会を開き対策を練りますが、取りあえず食糧を続けることと、仮住宅の建設などを考えています」と語った。

ぼう然の百世帯

普代 津波にまさる恐怖

【渡辺久慈支局長発】下閉伊郡普代村では炭焼きガマの飛び火から同村黒崎部落で四十六世帯、太田名部部落で四十三世帯が焼け出されたほか黒崎小学校、部落公民館なども全焼、同村はじまって以来の大火となった。二十九日午後三時ごろ普代村向野場山林地内の炭焼きガマ＝同村白井製炭夫馬場岩太郎さん（三二）所有＝から出火、空気が乾燥していた上、風速三五㍍から四〇㍍（普代村役場調べ）の強風にあおられてたちまち焼え広がった。火は同日午後四時ごろにふたつに分かれ西から太平洋岸沿いに進み、同五時ごろには約四㌔離れた黒崎と太田名部に接近した。このため同村の全消防団員、村民が出動して消火にあたったが、手のほどこしようがなく、午後六時半ごろ黒崎部落の民家につぎつぎと燃え移り、また黒崎から約二㌔北方の太田名部部落には同七時半ごろ火がまわった。

太田名部部落は六十一世帯のうち四十三世帯が全焼、二百五十八人が焼け出されたほか、太田名部公民館、同じく消防会館も全焼した。同部落は住家の密集した漁港で、三㌧級のサッパ漁船八隻と同港湾修築工事用の各種資材（久慈市小山組所有）も焼いた。

一方、黒崎部落は七十世帯のうち四十六世帯四百人が焼け出された。黒崎小学校（中野喜八校長、児童九十二人）の四教室の校舎と講堂などを全焼したほか黒崎開拓会館、同アワビ製造加工場、同開拓農協事務所、同部落会場、同共同精米所なども焼いた。両部落民とも火勢が強いうえ煙と土ぼこりにまかれたため逃げるだけが精いっぱい。太田名部では午後六時半に村役場に全員そろって避難したが、黒崎では一寸先見えない中をばらばらに避難した。両部落にブタ約百頭、ニワトリ約二百羽、乳牛約三十頭いたが、これらの家畜を全部焼死させた。

黒崎海岸は各種観光資源を抱きとくに天然記念物に指定されているシャクナゲもほとんど全滅し惜しまれている。普代村では三十日午前九時から村役場で臨時村議会を開き、対策を協議している。

焼失戸数、損害などは村当局で調べているが山林の焼失面積は約七〇〇㌶。建物の損害だけで一億二千万円を越すもよう。一瞬にして火の海と化し部落も十時間も燃え続けた火は三十日朝になっておさまったが、村役場で一夜をあかした部落民は泣いても泣き切れないといった表情。しかし太田名部の農業太田モトさん（五七）は「八反の畑と零細な漁業によって一家十一人を養ってきた。昭和八年の津波で全滅し、そしてまたとは……しかし土にかじりついても復興しなければ」と再起を誓っていた。

山ヒダから白い煙

空から被災地を見る

【共同特別機で遠山、藤井記者】宮城県境を越えて岩手県内にはいると、リアス式海岸の突出部に向かって走る山ヒダがほとんど全部白い煙を吹きあげ、スクリーンように陸地全体をおおっていた。三十日午前六時五十分宮古湾をすぎると全くの快晴、北の方にワタアメのような青白い煙の固まりが一つ見えた。高度百㍍ぐらい、その下が八戸市だった。フラスコを海岸沿いに倒したような八戸の町並み―それが白銀町の付近から燃え、ボッキリと消えていた。弱い北風に乗ってゆっくり動く残煙の下で、火はもう完全に消えていたがそのあたりには建物は一つも見当たらない。コンクリートの塀が二、三ヵ所、あとは火煙の激しさを物語るようなかわききった"無気味な焼け跡"だ。総面積の約四分ノ一に当たるのではなかろうか。上からみると家財やフトンなどが集めてあるのもほんのわずか、これは火の回りの早さを物語っているのだろう。ただぼう然と立っている五、六人ずつの人たちは、低空でかすめる飛行機の爆音にもなんの反応も見せない。市を南北に貫く国道は色とりどりの車でいっぱい。カーキ色の自衛隊車両の列が八戸市のかなり北にジリジリと動いていた。

午前八時すぎ下閉伊郡田老町上は一面の煙、高度千㍍で飛行機の中は木の燃えるにおいでいっぱいになった。煙の切れめから真っ黒に山はだがのぞく、長く見つめてはいられない。山のヒダというヒダに蚊取り線香がばらまかれたような状態、その煙はきれ目がなく南へのび、時々チラチラと赤いせん光がまたたく、空から見たかぎり、完全消火には三十日いっぱいかかりそう。大荒れな陸地をよそに海には波一つ見えない。チリ津波からちょうど一年、皮肉なコントラストだ。

屋台を全焼

三十日午前三時四十分ごろ、盛岡市菜園二三老松町地内の路地裏に置いていた同市上田東組裏相沢政美さん所有の屋台から出火したが、発見が早く屋台を全焼しただけで消し止めた。屋台は相沢さんが同夜午前一時ごろまで使っていた。原因は盛岡署で調査中。損害一万円。

ハンドル誤り通行人はねる

二十九日午後六時半ごろ盛岡市平戸盛岡駅前の道路で岩手郡雫石町西根字駒木野上村弘邦さん（二七）運転の小型トラックが左前方から来たバイクを避けようとしてハンドルを切りそこね、歩行中の盛岡市川原小路六二中央バス職員和川正さん（二一）をはね、後頭部に打撲傷を負わせた。和川さんは頭に内出血の疑いがあり、同市六日町栃内外科医院に収容された。

バイク盗まる

盛岡市三戸町二八二堀川方店員中村初幾さん（一七）は二十九日午前十時ごろ同市本町「昌寿司」前でバイク一台（三万五千円相当）を盗まれた。

トランジスタラジオ盗難

盛岡市大沢川原小路一三四電気器具商高橋堅造さん（五二）は二十九日午前五時半ごろ、同市菜園の店からトランジスターラジオ二台（一万八千二百五十円）を盗まれ、盛岡署へ届け出た。

バス車内で現金をスられる

盛岡市根田茂四ノ五四農業藤沢勘六さん（六九）は二十九日午前八時ごろから九時ごろまでに同市八幡宮―緑林中金間の中央バス内で背広の内ポケットにいれていた現金六百円、印鑑など三点をスられた。

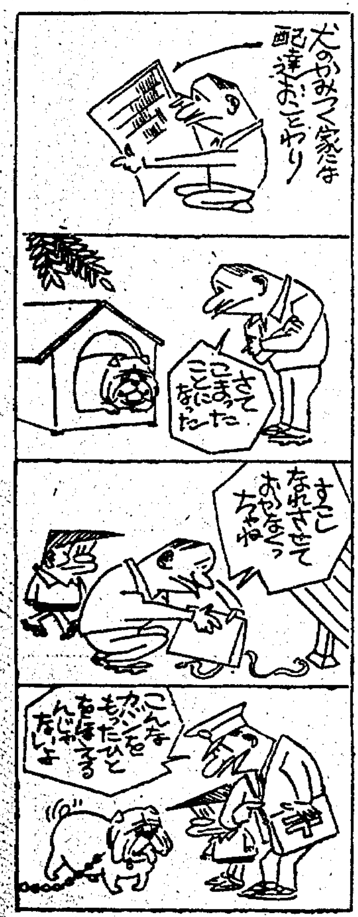
地獄絵さながら

宮古 悲鳴あげ逃げ惑う

【松橋宮古支局長、浜、藤原特派員発】二十九日午後二時二十分ごろ下閉伊郡新里村蟇目の二叉地内山林から出火した山火事は四号台風余波の二五～三〇㍍に達する強風と五十年ぶりの異常乾燥、不便な水利などの悪条件が重なって、またたく間に宮古市へ燃え移り、海岸線の女遊戸部落に至る二〇㌔はグレンの炎に包まれ、日杵、箱石、松月、女遊戸各部落の住家九十戸が全焼した。この山火事は閉伊川を越えて同市花輪地区に飛び火さらに隣接の根井沢、荷竹と山田町豊間根の石峠、羽羽の下地内山林まで延焼市民は恐怖におののいた。三十日には宮古市消防団員千人と火災現場周辺の部落民、応援にかけつけた第九施設団岩手駐とん部隊の隊員百七十三人と合して夜明けと同時に各火災現場へ急行、懸命な消火作業にあたっているが、風もすでにおさまり、民家へ延焼の心配はなくなった。宮古市役所では二十九日夜、災害救済対策本部を設け、菊池市長の指揮で直ちに被災者の救済に乗り出し、避難場所を失った女遊戸部落民百八人を第一分団消防詰所と宮古小学校に収容、応急処置として被災者一人当たり毛布一枚とパンを支給した。三十日は早朝から避難した部落民二千人のたき出しに、市内の婦人会員が総出で積極的に協力した。

宮古市内は電線の断線や風倒木のため、二十九日午後十時十五分一斉に停電、しかも風向きが急変するため、各地区の避難場所がしばしば危険にさらされ、悲鳴や泣き声をあげながら逃げ回る老人や婦女子の姿は地獄絵さながらの悲惨な光景だった。恐怖の一夜を過ごした女遊戸部落農業前川八郎さん（六〇）は当時のもようを「強風にあおられあっという間に南西から火の手が部落へ押しよせた。危険を感じて避難態勢をとっていたが、火の粉が飛び散り、避難道路までがしゃ断されるほどのものすごさで、着のみ着のままで逃げ出すのが精いっぱいでした」と語った。

新里村役場から宮古市消防署へはいった連絡によると火災原因は新里村二叉地内の山林の炭ガマから強風のため火を吹き出し山林にもえ移ったとみられている。


茶の間さん
改田昌直
犬のかみつく家には配達おことわり
さてこまったことになった
すこしなれさせておかなくっちゃね
こんなカバンをもったひとをほえるんじゃないよ

馬淵小の屋根とぶ

気仙と岩手町地区の被害

二十九日の強風で気仙地方と岩手郡下に次の被害があった。

▽二十九日午後九時ごろ気仙郡三陸村越喜来字前田地内志田組飯場木造バラック建平屋一二〇平方㍍が倒壊、当直者ふたりがいたが外出中でケガはなかった。損害二十万円。

カキダナ流失

▽大船渡湾内のカキダナ三百台のうち五十数台が流出、または沈没し、損害額は生産被害を含めて二百五十万円にのぼる見込み。

積船打ち上げられる

▽二十九日午後十時十分ごろ、気仙郡三陸村吉浜根白漁港に繋留中の吉浜漁協組所有の積船大鵬丸（二〇㌧）が近くの弁天崎に打ち上げられ中破した。損害五十万円。

西根の有線放送不通に

▽岩手郡西根村は大更、田頭、平笹、寺田の各農協の農事放送施設が二十九日夜の強風で電話線が約二百個所切断、五十五本の柱が倒れ全線の通話が不能となった。三十日は各農協組合員出動して柱をたてるなど復旧に協力しているが放送通話が平常にもどるのは二、三日かかる見込み。また葛巻町馬淵小学校の屋根が三三〇平方㍍吹きとばされ、損害は約五十万円。

住宅全半壊59戸

釜石、風害で二校休校

釜石市では二十九日午後八時四十分ごろ全市が停電、釜鉄の専用線も停電して全工場が午前一時ごろまで操業を中止した。釜石測候区の調べでは、午後十時から十二時までの瞬間風速は三五㍍から四〇㍍で、市街のネオン、看板、ガラス戸が乱れ飛び、街路樹も折れ、タクシーはストップ。また釜石駅午後九時十分の上り貨物列車は運休、駅待合室では通勤者と近くの避難家族六十人が徹夜した。釜石署でまとめた三十日午前九時現在の被害は住家全壊十二戸、半壊四十七戸、住家一部破損二百一戸で六十九世帯が被災した。また釜石市教委の調べでは釜石二中講堂の屋根をはじめ釜石小、八雲小、大渡小、中妻小、大松中、鵜住居小両石分校の屋根が六〇一、〇〇〇平方㍍飛ばされ、特に被害のひどい釜石一中、釜石小は教室、講堂を使えないため三十日臨時休校した。このほか釜石機関区の事務所機関庫の屋根も飛ばされ薬師山の愛の鐘の鉄塔も倒壊した。

屋根ぶつかり死亡

二十九日午後七時半ごろ、宮古市花輪農業上山武雄さんの三男勇見さん（一七）は自宅近くを通行中、風にとばされた火の見やぐらのトタン屋根が頭にぶつかり、県立宮古病院に収容されたが、三十日午前三時ごろ、頭がい骨骨折で死亡、二人目の犠牲者となった。

作業小屋の屋根とぶ

二十九日午後七時ごろ、稗貫郡石鳥谷町大瀬川農業熊谷香さん方の木造二階建作業小屋のトタン屋根約三三平方㍍がおりからの突風で吹きとばされた。損害は三千五百円。

食用バト盗難

盛岡市宿田二〇国鉄職員長沢金一さん（五七）は二十八日夜から二十九日朝にかけ自宅ハト小屋から食用バト一羽（四千円相当）を盗まれた。

[illegible]

【内陸・沿岸】三十日夜は西よりの風、晴れときどき曇りで明け方冷えこむ。三十一日は西よりの風晴れときどき曇り。

県下の交通事故

◇二十九日の事故　六件
死者　一人
傷者　三人
◇一月からの累計　七〇七件
死者　三一人
傷者　四五九人

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。